

ナス うどんこ病について



図1 がく部に発生したうどんこ病（赤丸内）



図2 葉に発生したうどんこ病

1 生態

本病は糸状菌子のう菌類（*Sphaerotheca fuliginea* (Schlechtendahl) Pollacci）によって発生する。発病部位には、小麦粉をかけたような白い菌叢が見られるため、他の病気や生理障害と区別しやすい。

本菌は、絶対寄生菌であり、生きた植物のみ発生する。キュウリ・アズキ・ゴボウ・花木など感染できる宿主が多く、ナスが栽培されていない時期は施設で栽培されている植物や施設外で生きている植物で越冬をする。ナスには、風により、本菌の分生胞子や子のう胞子が飛来し、葉上で発芽して一部の菌糸が表皮を貫通し、栄養を摂取して繁殖する。

本病が多発すると下位葉から黄化、落葉して生育に影響する他、果実のがくに発生して外観品質を損なう。

2 発生状況

本病は、夏から秋にかけて、発病がみられる。特に気温が25～28℃、湿度が50～80%のときに発生が多くなる。過繁茂となったほ場で発生が多く、光の届きにくい下位葉から発生がみられる。はじめは葉の表面に点々と白いかびが見られ、しだいに拡大して円形の病斑となる。発生は下位葉から上位葉へ広がり、葉柄・果梗・へたにも白いかびが見られるようになる。発病葉の葉色は薄い黄色から褐色に変化し、やがて落葉する。11月前半になると気温は生育適温より低くなるため発生が見られなくなる。

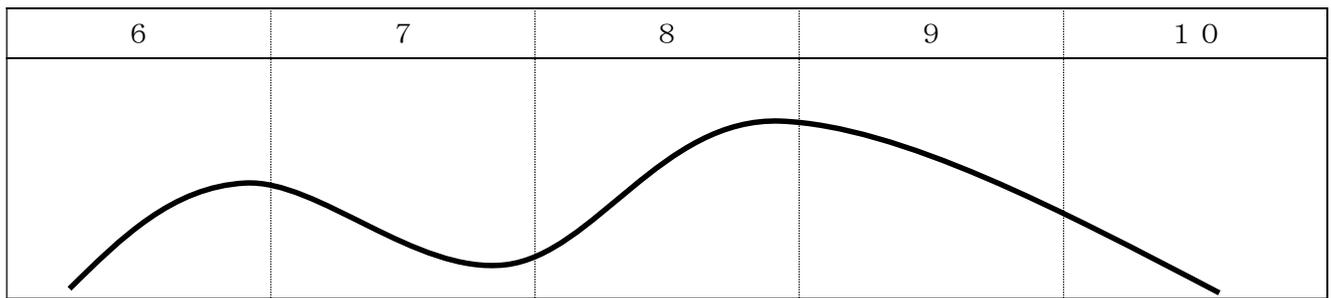


図2 ナスうどんこ病の発消長

3 防除対策

ナスには本病に対する耐病性品種がないため、物理的防除と薬剤防除を組み合わせ、下位葉での初発を確認しながら、発生後すぐに防除を行い、多発することをさける。

(1) 物理的防除

過繁茂となると、採光・通風を阻害して発生を助長するため、密植をさけ、適正な肥培管理・摘葉・剪定を行う。

(2) 薬剤防除

本格的な梅雨入りとなる6月後半から9月上旬にかけて、梅雨、長雨、冷夏などの気象条件や、過繁茂や樹勢が弱いなど耕種条件によって発生しやすいことから、初発が見られたら、不要な下葉かきを行い、葉裏まで丁寧に薬液を散布する。

なお、うどんこ病は薬剤耐性菌が発生しやすいため、防除散布時には同一系統薬剤の連用を避け、違う系統の薬剤によってローテーション防除を実施する。